

## 超簡単な現代哲学の道徳入門

はじめに

現代哲学の構造主義とポスト構造主義では道徳を与えてくれません。

現代哲学をマスターするとどう考え、どう行動するべきかは個人にゆだねられます。

言い換えると世俗の世界でどう生きるか、人生、生活、社会、自然、他者とどう関わるかを自分で決めます。

例えば「人を殺していいか」「盗んでいいか」について現代哲学から答えを導くことはできません。

「自分の欲しいものは人を殺してでも手に入れる」という生き方と現代哲学は矛盾しません。

この驚くべき結論を説明した上で現代哲学が与える道徳のモデルを示していきましょう。

### 第一章 現代哲学と道徳は関係ない

現代哲学の核心であるポスト構造主義について説明します。

ポスト構造主義より前の哲学の主題は確かさと正しさです。

正しいもの、確かなものがあるというのが意識的、無意識的な前提となっています。

ポスト構造主義はただの形式でありシステムです。

ポスト構造主義の構成要素に「正しい」とか「確かである」という要素がありません。

ポスト構造主義ははそもそも「正しい」とか「確かだ」とか言う考え方を哲学にとって必須であるとみなさず「正しさ」や「確かさ」と関係ないところで哲学を構成します。

現代哲学で「正しさや確かさとは何か」と問えば「正しさや確かさの定義による」という答えが返ってきます。

言い換えれば現代哲学では「正しさ」や「確かさ」は定義するものです。

別の言い方をすると主体が作るもの、決めるものです。

世の中には色々な哲学や思想があります。

イデオロギーおいつ言葉はアイデアとロゴスの合成語でアイデアのロゴスですが色々な哲学や思想をひっくるめてイデオロギーとここではまとめてしまいます。

ポスト構造主義も自体もイデオロギーです。

ポスト構造主義の特徴は上記の形式でありシステムであること、正しさや確かさという概念がないことです。

イデオロギーを分類してみましょう。

イデオロギーの中には「人間の人生ではどのように考え、どのように行動すべきか」「人間の人生ではすべきでない考え方や行動がある」とし、人間がどう考え行動すべきか、あるいはある種の考え方や行動の仕方を禁止するものがあります。

これは生活に影響を与えるので世俗のイデオロギーと呼びましょう。

またイデオロギーの中にはイデオロギー自体を思考対象とするものがあります。

例えば世の中にある色々なイデオロギーについて分析したり分類するイデオロギーです。

これをメタイデオロギーと呼びましょう。

ポスト構造主義は人間の日常生活や社会生活での考え方や行動に影響を与えません。

またポスト構造主義はイデオロギーを思考の対象としています。

ですからポスト構造主義は世俗のイデオロギーではないメタイデオロギーである、という事になります。

ポスト構造主義の特徴はイデオロギーというものはどれが正しいとか確かであるかという「優劣」関係をつけず、全ての世俗的イデオロギーは特別なものは一つもなく平等であると考えます。

道徳とは世俗の生き方、人生、日常や社会生活での考え方や行動のことです。

ポスト構造主義のこのような性質から現代哲学をマスターしても個人の道徳には直接影響を与えません。

## 第2章 現代哲学における道徳の在り方

重要な事ですのでもう一度書きます。

“現代哲学と道徳は関係がない”

他の表現をすると「現代哲学と道徳は独立である」「現代哲学は特定の道徳を決めない」などとも表現できるでしょう。

道徳なしに生きていくことも可能かもしれません。

また無意識に何かの道徳に従っているがそれに無自覚であることもあるでしょう。

では現代哲学と道徳を結びつけようとするのであればどうしたらいいでしょう。

現代哲学と道徳は直接関係ないので関係付けるためには手続きが必要です。

現代哲学と道徳は元々全く関係のないものなので関係の付け方は色々なつけ方がありません。

ですから以下は現代哲学と道徳を結びつける一例となります。

現代哲学では人間は自由に世俗的イデオロギーを選択できると考えます。

ですから人間とその人が従う世俗的イデオロギーの関係はその人が恣意的にその世俗的イデオロギーを選択して従うことを決めたという関係になります。

この場合世俗的イデオロギーが道徳に相当します。

念のため道徳をの意をはっきりさせておくと行動規範と言い換えられます。

ちなみに倫理学は人間の思いなし、思想を研究する学問で哲学や道徳はその研究対象となりますが、倫理と道徳を同一視する考え方もありその方が一般的かもしれません。

世俗的イデオロギーは人が生活の中でどう考えどう行動するべきかを示すためここでは道徳と同一視します。

現代哲学と道徳を結びつける一例を示しました。

ここからいくつかの興味深いことが分かります。

客観的に正しい道徳というものがあるのか分からないし、どんな道徳に従ったからと言って自分が正しいとみなされることもない、また主観的に自分が正しい道徳を選び実践していると思いたければ「正しい」ということを定義しなければいけない、ということが挙げられます。

ここから「現代哲学は相対主義的だ」と言われることがあります。

また現代哲学では人間は自由です。

この自由の意味は通常自由主義と言われるものとは異なります。

特別な世俗的イデオロギーは存在しないことを思いだしてみましょう。

これは世俗的イデオロギーを選ぶ際に選ぶ理由を見出しにくい状態をもたらします。

その世俗的イデオロギーを選ぶ理由が自分自身の主体性にしかよらないのです。

この様な自由をサルトルは「人間は自由の刑に処せられている」といいました。

自由はいい面もありますが反面奴隷の安逸をむさぼれなくなる短所があります。

またニーチェはこのような主体性を超人という概念で表現しました。

神は死んで（いないとは言っていない）自分自身を自分の主としないといけなくなったと思ったからです。

自由、主体、特別な世俗的イデオロギーが存在しないこと、自分自身で選択しなければいけないことは相互に関係し現代哲学による道徳を形作っています。

現代哲学では上記の他に2つ、メタ認知と自覚という要素があります。

これは人間が道徳的に生きる場合には現代哲学に限らず必ずしも必要ないものかもしれません。

しかし現代哲学はこの2つを重視します。

すなわち特別なイデオロギーがない状態で自由に自分の主体性で世俗的なイデオロギーを選択しそれに従う、そしてその状態を客観的に認識し自覚し続ける、という事になります。

多分この道徳における自覚とメタ認知を日本人はこころと行ったのでしょうか。

これは古代、中世の清明心、正直から儒教の陽明学などとも相まって心学、誠実の思想として日本の倫理思想史に結実し東アジアにおける日本の特徴ともなったようです。

現代思想ではメタ認知と自覚が低い、あるいはない世俗的イデオロギーの選択と従属をパラノイ德的（妄想気質的）といい、メタ認知と自覚が高度、あるいは過剰な状態をシゾイ德的（分裂気質的）といいます。

### 第3章 他の道徳との比較

ポスト構造主義はメタイデオロギーです。

それ自体が生き方の規範などを示すものではありません。

「人を殺してはいけない」「盗んではいけない」などの世俗的イデオロギーはメタイデオロギーを前提として選択される恣意的なサブのイデオロギーでありそれを選択しなければ

その人にとっては殺人も窃盗も禁忌にはなりません。

「人を殺してでも自分の欲しいものは手に入れる」「自分の思い通りにするためなら世界が滅びてもよい」という世俗のイデオロギーを選択することも現代哲学の下では問題ありません。

現代哲学から導かれる道徳は事実上勝手気ままを許します。

何でも本人の好きなようにしていいのです。

ただしそれを自覚し続けること、記憶し考え続けるなどの形で認知し続けることを要請します。

これは現代哲学的に道徳を実践する際に自分や他者、外部に大きな不幸や困難を起こす抑止力になるかもしれません。

また意識的か無意識的か悲観論や性悪説に基いている伝統的道徳が多い中で現代哲学的な道徳論は性善説に立っています。

現代哲学をマスターするくらいの高度な知能を持った人間は精神的な貴族性や利他心、心理学のマズロー理論の様に自分も他社も幸せにするような想いを持つのではないかと思います。

実際に現代哲学の習得のためには知頭の良さだけでは難しく、地道な知的訓練が必要になります。

逆に現代では地道な勉強を重ねれば現代哲学は習得できます。

地道な勉強というのは本人の向学心がなければ環境要因が大きくなります。

そういう意味では哲学者は余裕があり恵まれた環境で育ってコンプレックスが少なく自己肯定感が高いのかもしれませんが。

そういう意味では昔ほど上層階層と言えども生産力も低く身体と精神の衛生、公衆衛生的基盤が貧弱ですので性悪説になったのかもしれませんが。

現代哲学は性善説的な道德観と親和性が高いですが、従来型の道德は個人の主体も自由も選択能力も認めず自分以外の主への従属を強いる構成になっています。

また別の見解では現代哲学的な道德は特に世の中におもねる形にできていません。

多くの人間が現代哲学をマスターし現代哲学的道德に従って生きた結果世界が滅びたとしても人類が絶滅したとしてもそれすら是認する思想です。

ただだから従来型の道德がいいのかと言えば、従来型の道德は理念はあるかもしれませんが実際に理念を実現するように作られているかと言えば疑問符が付きますので公平に考えれば従来型の道德がいいか現代哲学を基盤にした道德がいいかと言えば分からないというのが現実でしょう。

非常にシンプルな現代哲学による道德を一例としてあげましたが別のモデルも構成可能です。

例えば頻繁に世俗的イデオロギーを入れ替えるドゥルーズ＝ガタリのモデルです。

他者や外部からの承認欲求や他者や外部への配慮など特に問題ない場合は個人主義に徹して一貫性や生合成に配慮することなく精神の赴くところに従いイデオロギーを変化させます。

その際に自覚やメタ認知も必要ないかもしれません。

「随処に主となれ」とは現代哲学と全く同じ思想である仏教の言葉ですが現代哲学では主体は自分であることが基礎であり他者や外部について考えるのは応用的な問題でしかありません。

おわりに

現代哲学は理論です。

理論というものは現実と関係なく存在しえます。

仏教のお釈迦様は現代哲学でいう構造主義を発案することで悟りを得ました。

この時お釈迦様は自分の抱えている問題が解決したので生きても死んでもどちらでもよくなってしまい一度は死のうとなさいました。

つまりお釈迦様が悟った内容は生きるべきだとか死ぬべきだとかの思考や行動を規定する世俗的イデオロギー=道徳ではなかったわけです。

その後お釈迦様は現代哲学のポスト構造主義と同じ内容である中道（おそらく=中観論）をお悟りになったと思われませんがそれもやはり世俗的イデオロギー=道徳とは関係ありません。

仏教にも戒律があるではないかという反論もあるかもしれませんが、仏教の戒律は空論や中観論は論理的に独立ですしどちらかからどちらかを導くことはできないので全く関係がありません。

主体であることはいいことばかりではありません。

何かに隷属していた方が楽で幸せな場合も多いでしょう。

しかし幸か不幸か我々は現代、現代哲学の統べる時代に生きていますので、道徳も自分で選択しなければなりません。

現代哲学自体は理論でしかありませんが、応用することで世俗、世間、社会、現実を生きるために利用できます。

もちろん本書は従来型の道徳を否定するものではありません。

主体性を捨て従属する世俗的倫理を決めて生きれば従来型の道徳で生きれますし、自由や自覚やメタ認知の感覚も失くしてしまえば更に完璧です。

ただどちらの道徳も選べるようにするためには現代哲学をマスターする必要があるでしょう。

(回数：4,931 字)